

ウイズコロナ、ポストコロナの時代 市民活動、NPO 活動、社会貢献活動はどうあるべきか 先駆の人を訪ねて 第5回



日本語教室は外国人と日本人がふれあう最前線 オンラインが苦手なら、外国人生徒に教えてもらおうよ 坂内 泰子（ばんない やすこ）さん （一般社団法人自治体国際化協会地域国際化推進アドバイザー）

緊急事態宣言に伴う自粛生活、免疫獲得のためのワクチン接種を経て陽性者数が漸減に転じ、ようやくまん延防止等重点措置が解かれたところですが、まだまだウイズコロナの時代は続きそうです。このような中、シリーズ第5回の「先駆の人」として、坂内泰子さんにお話を伺いました。

坂内さんは、元神奈川県立言語文化アカデミア教授で、本市の国際化協会をはじめとして、県内で日本語ボランティアの養成や外国籍県民への日本語教育に深い造詣をお持ちであるとともに、公務員への「やさしい日本語」研修講師もされていて、大和市にも大変ご縁のある方です。

今回は、そんな坂内さんに、日本語教室周辺の現場で感じられてきたことを語っていただき、今後の活動へのヒントを頂きました。

聞き手は、望月則男、船越英一 2022 年 2 月 16 日

— まず、始めに伺います。坂内さんは、どのような経緯で日本語教育の分野に入られたのでしょうか

日本文学専攻だったんですけど、仕事がなく、非常勤を掛け持ちしてた時に、留学生担当の方と親しくなって、日本語教室をつくるから手伝わないかって言われたんです

もともと日本文学専攻でご多分に漏れず、仕事が少ないので、非常勤を掛け持ちしてたんですよ。そうしたら、留学生担当の方と親しくなって、日本語教室をつくるから手伝わないかって言われたんですね。そこで慌てて勉強して、資格を取りました。優秀な留学生の多い大学だったので、彼らからすると私は変わった日本語の先生って感じだったでしょうね。

留学生は英語も使えたと思うんですけど、日本語で留学生同士が喧嘩をしたり、泣いたりすることもありました。あるとき、中国の女子学生が彼氏に振られたって泣くんですよ。

でも私、振られた人の慰め方と言ったって、日本流の慰め方しかできないじゃないですか。「そっか、わかってもらえなかったんだね」、「まあ、でも、そのうちいいことあるよ」みたいなことを言っても、どのくらい彼女の心に届くのか。一緒に怒って、「あなたを泣かせるような男はクズよ」と言った方がよいのか。結局私は、「よしよし」しかできませんでした。

異文化の人から思わぬ質問を突き付けられると、日本だけで世界ができていくわけじゃないことが痛感されますね。

と同時に、しきたりやモノのやりとりがなくとも、信じあえる力を感じることも多いです。「何年も離れていても、友だちは友だちだ」というような疑いのなさ。よく日本語ボランティアさんから聞く、学習者の遅刻のことも、ボランティアが待っていることを疑わないからこそ遅刻できるのかもしれない。「友だちだから、30分遅れても、きつとにこっと笑って迎えてくれる」という信頼関係ができてるってことかな。

— 坂内さんのお人柄がよくわかるお話ですね

日本語教室や、留学生との出会いが、私の出発点かもしれません

日本語教室は外国人と日本人が触れあう最前線です。外国人の考え方やふるまいから学ぶことが多いです。私も学びましたし、たいいていのボランティアさんが「教えられるのは私のほうよ」とおっしゃいます

私が相手をした人たちは、国へ帰れば間違いなくエリートでした。将来を約束されている人たちでも、外国で辛い思いをしたら、ひどく緊張したり、泣いたり、喧嘩したりするんだ、ここを支えなきゃというのが私の日本語教師としての出発点かもしれません。

— 神奈川県立外語短大をへて、坂内さんは神奈川県立国際言語文化アカデミア教授となられるわけですが、アカデミアでのお話を少し伺っていいですか

アカデミアでは、ボランティア、行政、外国人当事者の三者の考え方を聞くことができました

アカデミアでは、県民・外国人支援のボランティア、行政、外国人当事者それぞれの立場からの意見が聞けてとてもよかったです。私たちには何もできないけれど、話を聞いてもらえる関係がありましたから、それぞれに必要なだと思うことを伝えることができました。また、事業の対象は、県域全体なので、県内でも地域によって状況が違うし、ボランティアのやり方も多様ですが、外国人の生活をみなさん真剣に手助けされていると痛感しました。

— アカデミア時代に、坂内さんには大和市の多文化共生の現場に関わっていますが、地域の外国人支援のあり方について伺います

市民団体と行政と国際化協会のバランスが大切

アカデミア主催講座に参加すれば、さまざまな団体の方が経験を共にでき、特定の団体から出前講座のオーダーがあればそこと深くお付き合いすることもできました。

大和市には、生活に役立つ日本語の読み書きを学ぶ「つま読み書きの部屋」という協働事業の実践がありますけど、このことを、口頭で紹介すると、「大和でやっているのなら、私たちも考えてみよう」というボランティアの声があがりやすかったです。文字になったものを読むより、人の口から聞くほうが受け入れやすいのでしょうね。ですから、昔風ですが、情報媒体としての役割も意識していました。一般論として、市民は行政に上手に伝えることが苦手です。それは市役所の仕組みや仕事の分担などがよくわからないからです。そのため、ときには市役所のカウンターで言いたいこ



とだけ言って、それで終わる残念な人もいたりします。だから、「話し合う姿勢をもって、役所に掛け合えないとだめですよ」などと、私たち自身も中間的な立場で助言をしたりしました。大和市のように中間支援組織がある自治体ばかりではありません。大和市は、外国人を支援する市民団体（ボランティア）と、役所や学校と、国際化協会のバランスがよく、媚びず、へつらわず、適度な距離で、いい感じのテンションで結ばれている印象です。それぞれ必要だと思うことを伝えられる関係だと思いました。特に「つま読み書きの部屋」の前代表、志田早苗さん（故人）は、厳しく優しく、役所の立場も分かった上で、しっかりした考えを持って、前へ進む人でした。大和市の市民活動には、志田さんに限らず、そういう方が常に関わってこられたのではないのでしょうか。

— 大和市と青山学院大学との「包括連携に関する協定」に基づく大和市の「寄付講座」の多文化共生に関する事業では、3年間お力添えをいただきました

学生には、知らない制度の中で外国人が生きる大変さをわかってもらいたかった

青学の「地球社会共生学部」で話す機会を得られたとき、若い学生さんに伝えたかったことは、外国人が、知らない制度の中で生きる大変さでした。



学生は、当たり前前の制度を知りません。一人暮らしを始めて、実家から転出届をもって、新しい自治体に転入して、住民登録をします。アルバイトをすれば、税金が引かれます。消費税以上にインパクトが強いと思うんですね、給料が手に届く前に減っちゃうわけですから。それから、国民年金の加入義務で、また行政に納めるお金が登場します。学生は、自分の生活に役所が関わってくるという体験をしているのです。

もちろん、生まれる前から、母子手帳に始まり、ずっとこれまでも役所のほうでは関わってきているのですが、たいがい親が対応しますから、自分の目で確かめたり、自分で支払いに行ったり、自分のお金で税金を納めたりするのは初めてです。だから外国から移住してきた人の戸惑いを想像しやすいと思いました。

在住外国人は、よくわからない仕組みの中で、あれこれ想像でつなぎ合わせながら、何とか繕って生活していたりすることが、珍しくありません。日本の制度が外国人を排除しているわけではなく、制度の利用に到達することがとにかく難しいんですよ。これまでもボランティアさんがいろいろ苦勞されて来られましたが、まだまだ外国人と日本の制度を「つなぐ」ことができる人が足りません。旅行、留学及び帰国子女などで、海外を体験している若い人は、学校を出てからさまざまなところに散っていくのでしようけれど、今後、それぞれの場で出会う外国人が困ったときに、支援機関や行政の担当部署に「つなぐ」役目が大事だということを思い出してもらいたいです。



坂内さんにインタビューをしたカフェは、本紙1月号に掲載した「Fの初夢」に出てきたアトリエ風キッチン。インタビュー中盤に、Tさん登場。手づくりの花豆を振舞ってくれました。

坂内「あ、すごい花豆、私花豆大好きなんですよ」

Tさん「神戸のおばあちゃんに頼んだんです」

坂内「煮詰め加減が難しいんですね」

減多にお目にかかれないう花豆に話は弾んだ。

— 地域日本語教室に対してアドバイスをいただけますか

学習の継続は、楽しくわかって役に立つことから

ボランティア活動って私は日本語ボランティアのことしかよく知りませんが、日本語だけやってたら面白くないし、相手と付き合うネタが日本語だけだったらつまらない。公民館なんかお酒も食べ物も出ない。そんなところへ外国人が来るのは、「わたし」に会いに来るのだから、日本語ボランティアは楽しい時間にしましょうと言いたいのです。漢字1字でも、実際の生活、たとえば、洗濯機ですが、漢字のボタンは「入」しかわからない外国の方も少なくありません、洗濯機のパネルを写真に撮ってきてもらい、それで「脱水」とか「洗い」とか漢字を学べば、興味が沸いて楽しいし、わかりやすく、役立ち感も生まれまます。楽しく分かって役に立つ。つまり、勉強が生活を楽にするという実感がなければ、学習の継続が大変です。

— 最後にウイズコロナの時代、活動を休止する日本語教室も多いです。どうしたらいいでしょう

一概に対面じゃなきゃダメ！って否定せずにオンラインでやってみることも大切ですね

対面には対面のよさが間違いなくあるけれど、オンラインを使う試みは、コロナが落ち着いてからも追求していくべきだと思います。オンラインで授業をしている教室をみると、やんちゃ坊主の後ろにマリア様の像があったりして、家庭の様子が伺えますし、ボランティアの家の様子も見てもらえます。学習支援教室の場合は、保護者と会うことが容易になって、互いに安心感が生まれるようです。成人の日本語教室の場合は、第一のメリットは、幼い子どもをもつお母さんたちの学習機会が生まれたことです。天気の悪い日はボランティアも学習者もお互いに楽です。

オンラインは、生活に密着した勉強ができます。検索さえできれば、必要なものをすぐ手に入れて見せられるので、学びどきを逃がしません。



外国人の学習者には40歳以下の若い人が多いですから、彼らの日常は、紙と鉛筆ではなく、アプリや動画のクリップが深く食い込んでいるんじゃないでしょうか。

勉強の形というものも、時間が経てば変化するのは当然だと思います。何もこれまでのやり方を全部捨てるということではなく、ときにはオンラインも混ぜながら、今の時代の大和らしい活動を探っていくことです。オンラインで済ませられることは済ますと、密度の高い対面の時間が持てると思います。

公共施設にもっと高容量のWi-Fiがあれば、オンラインの苦手なボランティアも、横でやっている得意な人に教えてもらいながら、覚えられるのになと思います。こうしたインフラがお粗末なことが残念ですよ。

文化庁による日本語教育の体制づくりが開始されて、これから徐々に日本語教師の公的な位置づけが定められ、ボランティアとの役割分担みたいな話も出てくるでしょう。体制づくりのスキームでは、ボランティアは「学習支援者」とされていますが、その活動の中身にも、何らかの新しいものが求められてくると思います。大変ですけど、みんなで力を合わせて、新しいものを目指すことは、間違いなく面白さもやりがいもありそうです。

（編集・文責・写真：船越英一、イラスト：望月則男）